

Amat-i
挿絵 / 日茶のむ

義妹

達との生活は
気持ちいいけど
少し疲れる

試し読み版

プロローグ

第一章 義妹達との生活は楽しいけど少し疲れる

009

第二章 恵との生活は気持ちいいけど少し疲れる

087

幕間 黒歴史

152

第三章 夏海との生活は気持ちいいけど少し疲れる

158

幕間 あの笑顔

211

第四章 義妹達の調教は楽しいけど少し疲れる

222

第五章 義妹達との生活は気持ちいいけど少し疲れる

271

エピソード

307

番外編 義妹達との生活は気持ちいいけど少し怖い

311



登場人物紹介

Characters



いしかわあかね
石川 茜

夕夏が通う学園の生徒会長を務めている美少女。



いちじょうなつみ
一条 夏海

夕夏より一つ年下の義妹。
元気な小悪魔系美少女。



いちじょうめぐみ
一条 恵

夕夏と同じ年の義妹。おしとやかな美少女。

いちじょうゆうか
一条 夕夏

ちょっと童顔な
冴えない青年。

プロローグ

なんでこんなことになってんだろうか……。

嫌じゃない。

決して嫌なんかじゃあないんだが……。

「じゅぷつ……んちゅ……ズズつ……れろ……にはあん……ちゅつんちゅ」

「れるんぐつずぶつんぷつ……おにい……ひゃん……んちゅじゅぷつ……ずぶつ」

むしろ非常に気持ちいいんだが……。

「にいさあん……んチュ……もう我慢……できないれす……あむつずぶつ……アソコが……ん

ちゅずつ……アツいんですうう……」

「アタヒもお……つんぐつ……じゅぷつ……ホシイよお……」

「わかったわかった。今弄^{いじ}つてやるから口を休めんな」

そう言つて俺は、フェラチオしている義妹達のマ○コに足の指を突つ込んだ。そのまま適当に弄つてやる。

足でやつてるのに意味はない。強^しいて言うなら面倒だなあくらいの気持ちだろうか。

「ふつふあつう……ジュルる……んレロつ……うあん……チュパつ……」

「ンふうツ……あああん……んジュルレロツ……チュプ……ひグツ……アアあ……」

「ほーれイけイけ。這いつくばって無様にイッちまえ淫乱姉妹」

俺は二人の弱点を同時に引つ掻き回した。

「いいきつまつすウ。はあいイつ…くウばア…ツつ…て…いもう…つと…とおツ…
いっしょ…についいつちやアあついいイまアあす！」

「あたアしもおおいつくウ！ おね…つええちゃん…と…い、いイッしょ…オにいッぶ
ざまに…いいッちやウウ…！」

すぐに二人は潮を吹きながら同時に絶頂した。そのまま力尽きたようにぶつ倒れた二人の顔を覗き込むと、舌をだらしなく垂らして白目を剥いている。

せつかくの美人が台無しだわ。

クラスの奴らとかには見せらんないな。まあ見せる気なんてないが。

ちなみに俺が手マンでイカせた回数は三十回を超えてから数えるのをやめた。

おかげで今日はチンコを入れずに終われるみたいだ。

失神してる二人をそれぞれの部屋のベッドに運んでから、俺は部屋に撒き散らされてる二人の体液などを掃除しながら、どうしてこうなったのかを思い返した。

第一章 義妹達との生活は楽しいけど少し疲れる

今日は日曜日。

休日なので二度寝三度寝して昼過ぎに起きると、珍しく母さんが家にいなかった。

いつもはリビングのソファで爆睡してるのだがどうしたのだろう。悟あきらさんとデートだ
ろうか。

あ、なんか昨日言っていた気もするけど……なんだっけ。

まいっか。それより飯飯。

冷蔵庫……は良さげなのねえな。

冷凍庫……は微妙。

棚の中……はフレークはある。牛乳ねーけど。

んー……しゃーない。

どーせ今日は映画観に行くんだし外で食べよ。

うーん結構いい映画だった。この余韻のままゲーセンに行くかな。

と思いつつスマホの電源を入れると、すぐに母さんから電話がかかってきた。

「あんた一体どこほっつき歩いてんの!!」

耳がああああああ!!

スピーカーモードにしていたかと思うくらいの大音量である。

「昨日言ったじゃん。今日は観たい映画あるから新宿行くって」

「昨日言ったよね。会わせたい子がいるから明日は家にいなさいって」

あつ。そういえば言ってたわ。明日は家にいなさいねって。忘れていた。

「とにかくさっさと帰ってこい!! ……あと、新宿にいるんなら、いつもの所でアップルパイ買ってきて」

「へーい。ついでにスイートポテトも買ってこわ」

「スイートポテトは十個買ってきてね」

「え? 多くね?」

「会わせたい子がいるって言ったでしょ。もう家にいるから買ってきて」

「へーい」

ふーむ。誰だ?

ま、誰でもいいか。

新宿から三十分ほど電車で揺られ最寄りの駅に着いた。

ほんとここなんもねーよなあ。

田舎のような良さもねーし。

にしてもクソ暑い! 九月ってなんでこんな暑いんだろ。早く帰って冷房の効いた部屋

で録画したアニメとドラマ観てえ。

とか考えながら歩いて十五分。我が家のアパートに着いた。エレベーターで五階に上がる。俺の家は五〇三号室だ。

鍵を開け、大きな声で、

「ただいま帰りました!! アップルパイとスイートポテト買ってきたので許してくださいませ!!」

と叫びながらリビングに入ると、

「あ、おかえりなさい」

「おかえり〜」

なんか女性が二人いた。

家に帰ったら見知らぬ美人が二人いた。

一人は同じ年くらい黒髪ロング綺麗な女の子。

あと胸がデカイ。服になぜか書いてあるNOの文字が歪むほど。

一人は三つくらい下と思われる黒髪ショートの可愛い感じの女の子。

逆にこっちは貧乳だな。隣の巨乳のせいで余計に小さく見えるよ。

ノースリーブのシャツから伸びる腕は隣の子ほどじゃないけど結構白い。

うん、ほんと誰。

「おかえり。夕夏^{ゆいか}くん」



「あ、悟さん。こんばんは」

俺の後ろから現れたのは一条悟さん。

一八〇を超える高身長と爽やかな塩顔を併せ持つイケメン。俺の母さんの恋人だ。

詳しい経緯はよくわからないが、もう付き合っただけでかなり経つ。そろそろ結婚してもいいんじゃないかなとは思っているけど……どうなんだろう。

「何がどうなってますか。なんか、美人二人がうちにいるとかちよつと考えらんないっていうか。これは夢？」

小声で悟さんに聞いてみる。

「落ち着いて。二人のことはあとでちゃんと紹介するから、まずは夕飯を食べよう」

「はあ。まあなんかよくわかんないですけどとりあえずそうします。あ、母さんは？」

「ああ、美玲さんならキッチンにいるよ」

「どーもー」

とりあえず悟さんとの会話を切り上げつつ母さんの所に行く。

キッチンでは母さんがバタバタと慌ただしく動いていた。

後ろで軽く結んである髪が同じようにバタバタ動いていて、これが本当のポニーテールというやつかと少し笑ってしまう。

「母よ。あの美人二人はどこのだなただ。悟さんがあとで紹介するとは言っていたが気になっただろうがない」

「ただいまはどうした、馬鹿息子」

「……ただいま」

「はいおかえり。二人のことはあとで紹介するから待ってなさい。あと、今日はもんじやだから鉄板も出しといて」

「チッ。二人ともはぐらかしおって。つか今日もんじやかよ、最高じゃん。ビールある？」
「今日はやめときなさい。二人がいるから」

「一体誰なんだよ……」

地味に気になりつつ俺はキッチンを去り、また居間へ。

美少女二人はソファァーで談笑、悟さんはスマホをいじっていた。

俺はそれを横目にテキパキと動く。

テーブルの上に鉄板を出して、コンセントを差して、カレーパウダーを用意して、ジョッキを出して、準備完了！ あとはもんじやを作るだけ。

途中、二人が立ち上がってこつちに来たが、座ってていいよと言いつつさっさと準備を終わらせると、二人は残念そうにソファァーに戻った。

あとは母さんに任せればいいから……悟さんと話してよかな。

「悟さん。最近の母さんとの進展はどうっすか？ そろそろ結婚してもいいと思うんすよ。どうっすかお義父さん。てか結婚してくださいよ」

椅子に座りながら聞くと、悟さんは苦笑いして頭を掻いた。

「夕夏くんは美玲さんと僕が結婚することには賛成なのかい？」

「勿論もちろんですよ。あ、でも結婚したら俺はお義父さんと呼んだほうがいいのか悟さんと呼んだほうがいいのか」

「どちらでも。ただその敬語はやめてもらいたいかな」

「あー確かに。まあ結婚したらの話っすけどね。もしするなら反対しないんで言ってくださいね！ 結婚式とかは金かかるしいらないと思いますけど」

「あー……うん。そうだね。あ、今日は二人がいるからビールはダメだよ？」

「あ、やべ。つい癖で。しまつとこ」

いつの間にか手に持っていたジョッキをしまったところに母さんが具材を入れたポウルを持ってリビングに入ってきた。

「はいはい。みんな席に着いてー」

全員が席に着く。

そして母さんの口から飛び出した言葉は、

「私と悟さんは一昨日入籍いたしました。今日からあなたは佐藤夕夏から一条夕夏になります。そしてあなたには姉妹が二人できます。仲良くしてもらおうように。あと、ここじゃ五人で暮らすには狭すぎるので引っ越します。場所は悟さんの自宅です。一週間以内に荷物をまとめておくように。以上！ では初めての家族もんじゃパーティーを始めます!!」

「わあああああ!!!!!!」

「……………」

「どうした馬鹿息子。無言で私の顔見て。まずは姉妹たちに自己紹介でしようが」

えっと……え、入籍？

もうしたの？

役所に行ったの？

いつの間に？

つか妹？

悟さんって娘いたの？

「まあじかよお」

なんか変な発音になったような気がするけどそんなことよりもだ。

「えーと。色々言いたいことや聞きたいことがあるんだけど……。とりあえずだ。もう入籍したと。そして俺に父親ができた。さらに姉妹ができた。んで悟さんの家に引越しますと」

「私が言ったことをそのまま復唱せんでよろしい。さっきも言ったけどまずは自己紹介なさい。それで仲良くしてもらいなさい」

なんかもうどうでもよくなった。

考えることをやめよう。

基本的に意味がわからないと思っただら考えるのはやめるってのが俺のポリシーだ。

それに二人とも俺とそんなに関わることもないだろうし、適当に自己紹介してあとはゆる〜く付き合っていければいいや。だいたい俺はこういう美人さんと関わるのは苦手じゃ。「えーと。初めまして。俺の名前は佐藤……じゃなくなるのか。えーと、一条夕夏です。東若学園高等部三年です。趣味は……あ……気になったことにとりあえず手を出していたので結構あります。興味があれば聞いてください。あと、家族になりましたがいきなりは接しづらいだろうし、別に兄妹として扱わなくて問題ないです。なんかいる男程度の扱いで無問題。とりあえずこれからよろしくお願いします」

こんなところかな。

なぜかロングの子がどこことな……怒ってる……ように見えるけど。……なんでキレてるの？ 今の自己紹介に何か変なところはあっただろうか。

あ、まさか！

「誤解しないでね。俺は別に家族になりたくないとか思ってますから。ただ、やつぱり年頃の女の子にとって、いきなり同年代の男が近くにいるってのは心情的にどうかかなあと思っただけで……。仲良くしてもらえるように努力しますから怒らないでくれると嬉しいんですけど……」

なんか最後のほうは小声になってしまった。

だってなんか話せば話すほど顔に怒りの表情が出てきてるんだもの！ 何がいかんのじや！ 初対面でこんな表情を浮かべられるようなことしたか？

悟さん改め義父さん助けてー！　って目線で訴えたら、

「えー……はい。じ、じゃあ次はうちの番だね！　というわけで二人ともよろしく！」
無理矢理、誤魔化してくれた。

えー義父さんや。

「わかりました。では私から」

と言ったのは黒髪ロングの子。

「こんばんは。一昨日ぶりです。私の名前は一条恵^{めぐみ}。夕夏^{ゆげ}くんと同じ東若学園高等部三年。夕夏くんと同じA組。そして、夕夏くんの隣の席に座って授業を受けています。一昨日も勉強しながら、隣で熟睡していた夕夏くんを見ましたよ。これからは仲良くしてくださいね？」

「……………」

今この子、俺と同じ学園で同じクラスで俺の隣の席に座ってるって言った？　え？　そんなことがあるの？　てかじゃあ俺の初めましてに怒ってたの？　あんたの隣にいただろうがふざけんなってこと？

「えと……、その……、すみません!!　俺はクラスの奴らの顔も名前もほとんど覚えてないのでわかりませんでした！　覚えましたから！　もう絶対忘れないので！　許してください！」

「いいですけど、あとで話がありますので、覚えておいてください」

話ってなんや……。

「じゃあ、次はあたしの番だね！ あたしの名前は一条夏海^{なつみ}。東若学園高等部二年です。よろしくね！ おにいちゃん！」

まさかの一つ下でした。

絶対中学生だと思ってた。

だってこの子、目算で一四〇センチくらいよ？

そして恵さんは目算で俺と同じくらいかな。

ちなみに俺は一六五センチ！

こうして突然、義理の姉妹ができた。

まさか恵さんのほうはほぼ毎日会っていたとは。まあ覚えてはいないんだけど。

俺は昔から人の顔とか名前とかを覚えられない。というか覚える気が起きない。

クラスの奴らも全く覚えていない。大体からして関わる気がない。

学校に行ったら寝ているか、愛用のヘッドホンでドラマCDを聴いたりしている。

学校関係で覚えているのは担任と生徒会長のみ。生徒会長のことを覚えているのは当たり前のことなのだが、今は詳細は割愛しておく。

つか恵さんからの呼び出しとかなんの話やろか。

まあ十中八九、学校では話しかけんなってとこかな？ 今まで通り過ごせばいいってことよね。

帰りにアイスでも奮ったげようかね。

結局、毎日の登校とたまに帰りも一緒にすることになった。

帰りがたまになのは、俺が茜と会うからだ。

ちなみに彼女が生徒会長であることは言っていない。

そこまでは言わなくていいだろうと思っただ。

二人も聞いてはこなかったしな。

あと、二人はクラスの奴らには俺が義理の兄になったことを、この一週間の間にすでに話していたらしい。

それでも周りが俺に何も言わないのは、今までの俺の態度のせいなんだろうなあ。

どーでもいいけどなっ！

だからさあ、今日の周りからの視線が今までの視線と変わっているのは気のせいなんだ。

具体的には、路傍の石ころを見るような視線から、まるで親の敵かたきのような視線に変わっ

た気がするの、気のせいなんだ。

「電車かあ。私は満員電車は嫌だけど義妹さん達が羨ましいなあ」

「なんで？」

「だってゆうくんのことだから、きっと二人をドアの方に追いやって、二人が人混みに潰されないようにしてたんでしょ？」



今はお昼。

さっきまで夏海の弁当を食べていて、今はお茶を飲んで一息ついているところだ。

「言われてみるとそうかもしれない。完全に無意識だったわ」

「ゆうくん優しいからねえ。それにゆうくんが来るまでは、いつも二人で満員電車に乗っていたわけだから、そういうことをされたら嬉しいんじゃないかなあと思ってさ。私は嬉しいから」

「なるほどね。兄としての好感度が上がってくれてるならいいわなあ」

「……そうね。ところでさあ。ご飯は食べ終わったわけだけれども……」

そう言っ、茜は顔を少し赤らめながらスカートをたくし上げる。

「挿入してください、ご主人様！」

茜はノーパンだった。

そしてパイパンマ○コからコードが二本伸びていて、そのコードの先は黒のハイソックスに包まれている両太ももに繋がっている。

要はピンクローターを二本突っ込んで、太ももとソックスの間にリモコンを挟んでいるわけだ。

まあ、だと思ったよ。

だって、ブーって音が飯食ってる時に聞こえてたから。

「来い」

俺はスラックスとパンツを脱いで生徒会室の机に腰掛ける。

コイツはかなり愛液を出すからな。

前にチャックだけ下ろしてハメたら、スラックスの股間のとこがビチャビチャで、まるで漏らしたみたいになったんだよね。

そして茜が机に乗ってくる。

俺の横で机に仁王立ちしている茜のマ○コからピンクローターを二本とも抜いてやった。「……んあっ！」

ピンローのおかけかすでにマ○コはドロドロだ。出来上がってるのが見るだけでわかる。そして俺が勃起したチンコを指差すと、茜はニコツと笑い、対面座位の状態で跨ってきた。

そしてまさに挿入^{はい}する直前、俺は手でチンコの位置をズラして、挿入^{はい}らないようにしてやる。

「あヒンッ!？」

結果、茜のクリトリスを擦る俺の亀頭。

「ご…ご主人…:…さ…ま。なんで…:…?」

まだ俺はほとんど何もしていないのに茜の顔は蕩^{とろ}けきってる。

可愛いじゃないか。

でも…:…。

「はあっ……えっあ！　ううウハアっえうアふっ！」

俺は、おそらく謝っているであろう茜に腰を打ち付ける。

「おーい日本語になつてないよー？」

まあそうはさせんとばかりに突きまくってるからな。

「も、もうしっ……ツツわけ……ごザッいいませんん!!」

「いや別に責めてないから。たださあ、俺ばっか動くの疲れちゃったなあ」

そう言つて俺は唐突に動くのをやめる。

茜の肉壺は動かなくなつた俺のチンコに不満があるかのようにムギユムギュと締め付けてきた。

「はへっ……わかりまひた……わらしが……ンふう、動きます……なので……ふう……ご主人様は……そこに寝て……へうっ……くらしやい……」

言われた通り繋がつたまま俺は寝転がった。

完全に騎乗位だ。

生徒会室の机はデカイからこういう時は便利だ。

「……では……ふわっあああ……あんんっ！　……ンッ！　……アッんんッ！　あううウ……んんっ！　ううウアウ！　ウウウ……ううフワッ……ウウあ！　あっ……あアあ

ッ！　んんっ！　んんっ！　ああつううう」

「いいぞー結構気持ちいいぞーもつと腰振れー」



実際メチャメチャ気持ちがいい。

二年間も俺のを挿入^いれている茜の腔^{なか}内は、完全に俺のチンコの形や締め付け方を覚えて
いる。

気持ちよくないわけがない。

「っんっ！ つああつ……ああつ……んっ！ ……あッアアッあアッんあアッん
っ！ ……ウウアアッ！」

「ふう……そろそろ出したいな……おらッ!!」

「ハガアツツ!!??」

茜の腰が下がった瞬間、思いつき突き上げてやると、背中を反らせて一瞬だけ声をあ
げた。

そして、力が抜けたように俺にしなだれかかってくる。

顔を覗くと、茜は白目を剥いて、半開きの口から舌が覗いていた。
なんてザマだ。

「コラっ。何休んでやがるっ！俺がイけねえだろうがっ！」

「ぐふっ……ううえう！ ぎやウウえウ！ ぐフツが！ アえグツぐアウウウ！ ウグ
フッアッ！」

——バチュンバチュン！ ズチュズチュ！ バチュンバチュン！
掴みごたえのあるケツを持つて連続で下から突きまくる。

対面座位の時よりも高速でだ。

ポルチオを何度も扶られながら、子宮の奥の壁を高速で叩かれた茜は、すぐに目を覚まし、いきまわつては気絶しかけるを繰り返している。

「うごっあ！ ……ごしゅっつはアッあがッごしゅじんさまっ！ ……うくつうもうッ！
くっあがっ！ ……がっえぐつもういきますかアアッ!? ウウウアッ！ ……がッグふッ！」

「あーそろそろ出そうだなあ」

「…はあっでは…うがあえういつて！ ……いつてくらはい！ えウ！ えウアッ！ があ…あガッ！ ……ア！ ……うくッグわら！ わらしにッ！ あがあうウウうらしあ！
ふぐイイツッ…ううう！ えう…！！ くらしやい！ ……へイヒイッ」

「いいぜえ！ 出すからマ○コしっかり締める！」

ラストスパートでさらに加速させる。

——パヂユパヂユパヂユパヂユパヂユパヂユパヂユパヂユパヂユ

肉同士が当たるたびに拍手のような音と水の弾ける音が止まらない。

そして、

「イグっ!! ごしゅじんさまっ!! いっしよに!! オホッ!! おお……んオッ!! いっしよにイぎまわっううううう!!…!!」

「俺もっ!! 出るッ!!」

「あ、そだ会長。わりいんだけど、今日は義妹達と帰る約束しちゃったんだわ。一緒に帰っていいかな」

「そうなの？ いいよー！ ちょうど私も今日の放課後は予定あるから言おうと思つてたところなの」

「あらま。なにかあんの？」

「ほら、朝言つたじゃん。美咲ちゃんみさきが風邪引いちゃつたつて」

美咲ちゃんとは、茜のことを『お姉様』と言つて慕っている副会長のことだ。

「あー言つてたね。…つて忘れてた。茜の写メ付きお見舞いメール送るんだつた。会長、ちよつと机に座つて脚を開いてくれる？」

「はい！ わかりました！」

そして茜は素早くパンツを脱いで、机に登つてM字開脚を決める。

割れ目から少しさつき出した精液が垂れてきてエロい。

ただしつかりアへ顔Wピースなのは…ちよつとイラツとした。

俺は撮影したあとに、

「うん、これは送れないから、そのまま普通に座つてこつち向いて笑つて？」

「うん！」

保存はするけどな！

帰つたらパソコンに落とすところ。

んー……………おしっ決めた。

「恵、俺の前に立ってオナニーしろ」

「……………へ？」

「もう一度だけ言うぞ。今すぐ、俺の前に立って、スカートをめくって俺にどうやって見えるようにして、パンツ越しにオナニーしろ」

「にいさんの前で…ですか？」

「早くしろよ。こっちはしようがねえから付き合ってたんだ。言うこと聞かねえならやめにする。写真をバラ撒くってんなら今すぐお前の部屋に行ってパソコンぶっ壊してお前のスマホも叩き割る」

「は、はい！ しますす！ しますから！！」

恵は床に座っている俺の目の前に慌てて立ち、スカートをたくし上げ左手で押さえた。レースがついている真っ白のパンツを恥ずかしそうに俺に見せつけてくる。言っちゃなんだが割と普通のパンツだな。恵はその上から右手の指を這わせて、オナニーをし始めた。

「……………んっ…フツ……………どうですか？ ……見えますか……………っん」

「慣れてんのか？ 直接触ってねえのにもう感じ始めてんのかよ」

「ふんっ……………に、にいさんに…んくっ……………見られてるっ……………から、いつもよりも……………感じます……………んんっ」

「へえー。俺に見られて感じるんだー」

俺は恵のパンツに顔を近づけた。

「…スント、おいおいなんか臭うんだけど。パンツ越しになんか臭うんだけどこれなんの匂い？」

「……ハアツハアツ、ちつ近いですにいさん！」

そう言つて、逃げようとする恵の足を押さえる。

「おい、答えろよ。手は休めんよ」

「キャツ!! …は、はい。…フクツ……んツ……私の……お……お……ん……この……匂いで……す……ハアウンっ！」

「へー、お前の性器つてこんな匂いなんだあ」

「は、はあい……私の……おマ○コの匂いで……す……」

恵のパンツは漏らしたあとみたいにグシヨグシヨだ。パンツ越しに桃色の割れ目が透けて見えるほどのだから相当なもの。予想してたよりかなり濡れやすい体質らしい。

「ふう……くひい……ンツ、ふああアン……ふう……ンツ……フウ……」

暫く無言でジツと恵の陰部を布越しに見ていると、上からビチャつと何かが降ってきた。俺の目の前を通過し床にベチャつと落ちる。

見上げれば恵が口を半開きにして俺のことを見下ろしていた。目がトローンとしていて、口元から一本の糸が垂れている。

「そろそろ直接触りたいか？」

そう恵に話しかければすぐに口を動かしたが、あんまり呂律ろれつが回らないらしい。何度か
言いかけ、ジュルリと唾液を啜り、ようやく言葉を紡いだ。

「…は…は…はいいい…直接…触りたい…れす」

「触りたいかそうかそうか。だから？」

「…え？」

手を止め、惚けた顔で見下ろしてくる恵に俺は続ける。

「だからなんだよ。触りたいだけじゃわかんねえ」

「え…と。その…」

「何かをさせていただく時は？ わかるよな？」

恵は少し考えるそぶりを見せると、すぐに恍惚こうこうとした笑顔を俺に向けた。

「…わ、わらし…のイヤらしい濡れ濡れ変態処女マ○コを、にいさんの目の前で直接触
らせて…ください！」

まあ見下ろしているのは許してやるか。何様だ俺は。

「いーよー。俺の言う通りに動いたらな」

「はい、言う通り…にします…」

「後ろを向いてケツを突き出せ」

「はい！」

すぐに恵はその場でクルッと回り、立ったまま俺に向かって形のいい尻を突き出す。

程よい肉付きで、揉み心地よさそうな尻だと、パンツに覆われていてもわかる。

俺は良く見えるよう、片手でスカートをめくって押さえた。

「その状態でパンツを下ろせ。ゆっくりだ。膝を曲げるなよ」

「はい……」

言われた通りに、突き出しながらゆっくりパンツを下ろしていく。

スカートを押さえられてるので、下ろしていく過程がよくわかるな。

少しずつ、あらわになっていく恵の尻。それと同時にどんだん俺に向かって突き出される恵の白い尻。

最初に現れたのは恵のピンクアナル。ヒクヒクと蠢うごめいて時折中まで見えそうになっている。……まさかアナニーもしてるんじゃないかな。……やってそうだな。

次に現れたのはやはり桃色の陰裂。そこから伸びる愛液の糸は、下着と恵を繋ぎながらただただ下へと伸びていった。パンツが太ももまで下ろされた頃には、恵の恥部が、俺の目の前いっぱい広がっていた。鼻からは愛液の匂いがどんだん流れ込んでくる。

「……ハアハアハア……にいさあん……ど、どうですか？」

「こんなにドロドロになっちゃって。お前とんでもねえ変態じゃねえか」

「す、すいません……!! ……ハアッ……んッ……それであの……」

「なに？ あ、スカート押さえてやるから、自分でマ○コ開いてみな」

「は……い……」

何か言わせる前に、指示する。

恵は自分の手を割れ目に這わせて、思いっきり外側に拡げた。水気のある音と共にラビ
アが拡がりサーモンピンクの膾口と凄まじい発情臭が俺の顔を直撃する。

「綺麗じゃん」

思わず呟くと、

「……ヒイウツ！」

「ツツ!!」

謎の奇声にビククリして、俺はスカートから手を離してしまった。

恵は前に倒れてうつ伏せになった。そのままグッタリしている。

「へ？ おい！ どうした!？」

やりすぎた!! 足疲れたとか!？」

「……………い」

「い？」

「イっちゃいましたああ……」

「……………」

マジかこいつ……。

「あのさあ、どのくらいの頻度でオナニーしてんだ？」

いくらなんでも感じやすすぎやしないかと思っただけ聞いてみる。



「ハア…ハア…ハア…ハア…毎日…んハア…してますよお…ハア…ハア…」
ある程度自分で開発済みなわけね…。

ま、それはさておき。

「ひゃあっ!？」

俺は恵をひっくり返して、パンツを取り、M字開脚させる。

恵は悲鳴をあげながら、自分の手で性を隠した。

ところでパンツをほっぼったのだが、床に落ちた時ビチャって音がしたのは気にしない
ほうがいいよね…。

俺は手で足を押さえたまま、

「手は後ろだ。今更隠してんじゃねえ」

と言うと、恵は顔を真っ赤にしながら、ゆっくりと手をどかしていく。

「ふーん。少し毛が生えてんのな。俺が見るから剃ったとか？」

後ろからは見えなかったが、少し薄めの陰毛が生えていた。

「そ、剃ってない…です…。元々…薄いです…」

「そっかあ。ところで手は後ろって言ったよね。早くしろよ」

「はいい!」

恵は中途半端な位置にあった手を、すぐに後ろに持っていつて身体を支える。

この体勢だと恵はM字開脚しながら胸を反らせているからおっぱいが突き出されていて、

うん……エロいね。

しかも、Tシャツ越しにおっぱいの頂点が……ってやっぱノーブラかよ！
ほんとにエロいなあ。

乳首が思いっきり勃起している……。

「今どんな格好してるか教えてやるわ。そのまま動くなよ？」

そう言っつて、押さえてた手を離す。

言われた通りに動かない恵を横目に、俺は机の上に置いておいたスマホを取ってカメラを起動させる。

「動くなよー。動いたら罰ゲームなー」

言いながらスマホのレンズを恵に向けて、すぐに写真を撮った。

「……へ……写真？」

「うん写真。記念撮影。よく撮れてるでしょー。あとで送ってやるよ」

画面を見せると、恵は目を見開いたあと、すぐ顔を背けた。が、横目でチラチラ画面見ているのがバレバレだ。

俺は、またスマホのレンズを恵に向けて、今度は録画モードに切り替える。

「はい……オナニーして」

「……ふえ？」

「直接触りたいっつてお願いしたじゃん。ほら早く」

「嫌だ」

小首傾げたような声を出しても嫌だね。

「むう、なんでも言うこと聞くなって言ったのに」

「言ってねえよ！」

「言ったよ。二週間前に」

「は？ 言ってるね……言ったわ」

たしかに言ったけども、どこに義妹からのシックスサインして！ ってお願い聞く義兄がいるか。

「もう今更じゃん。おねえちゃんとだつてしたんだからあたしとしたっていいでしょ」
それを言われると返す言葉が見つからない……。

「あーそー。……わかった」

そう言っただけは顎のギリギリあたりに股間を下ろして、俺のちんこをジャージの上から触り始めた。

「やめろや！」

「もう諦めて。それに男なんだから、なんでも言うこと聞くなって言った責任があると思うの」

そう言いながら、今度は中に入ってきた。

「あはっ、なんだかんだ言っってもう硬くなってきた」

そして、

「じゃあごたいめーん」

穿いていたトランクスごと一気に下ろされた。

「うふふふ。本で見たのより大つきいー。えーと、確か……こうだっけ」

そう言つて夏海は、俺の亀頭に手のひらを当てて擦り始め……つて、

「ギャアアア痛ええええやめろ馬鹿ああ!!!!」

「え? ど、どしたの? こうすると気持ちいいつて本で読んだんだけど」

「ふざけんなよ! 亀頭はメチャクチャ敏感なの! そんな所を乾いた状態で擦ったら痛いのは当たり前だろうが! なんの本読んだ? なあその本に濡らせとか書いてなかった? 読むならちゃんとしてよ! 俺のチンコ使い物にならなくなったらどうしてくれんだ!」

「ご、ごめんなさい……」

「はあ……、もういいだろ? な? やめよ?」

「わかった……」

お、わかつてくれたか。

「そうそう。ならこれほどこい」

「じゃあ舐める!」

「て……おい!!」

「手はやめて、口です。これも練習したからね！」

おいおいおいおい!!

「まて! まじでまて!」

「やだ待たないいただきます」

「いただきますじゃねえ!」

抵抗できるはずもなく、俺は萎えきつたチンコを咥えられた。

「あむっ……んチュッ……ッブ……んハア……少し硬くなってきた。……んぶちゅっ……
ヂュプッ……んぼっ……なんか……おにいちちゃんの大きすぎない? キュウリより太いんだ
けど」

比べる対象がおかしいだろ……。

でも、コイツマジに上手い。

俺の股間はあつという間にさつきよりも硬くなり、夏海の口の中で脈動し始めた。

「ちゅっ……ンプっ……ちゅっ……んぐっ……ンチュ……ぶぢゅう……ンパッ……ハアハア……
おにいちちゃん……レろッ……先っちよからさあ……ンチュウ……ヌルヌルしたので起きた
ね……えろッ」

カリ高に感じる舌のザラつきと唇が裏筋を通る時のゾクゾク感がさらに俺の肉棒から快感を込み上がらせてくる。

「フッフ、あむっずチュっ……おっひい……んぶっんぶっ……はをはへあいお……ぶぢゅ

う……っハア……歯を立てないの難しい……」

そうは言うがその時折引つかかる歯の感触がいいスパイスになっていて俺は腰をビクつかせるのを抑えるのに必死になっていた。

「むブウっ……れおっ……ズヂユツズヂユツズヂユツ」

「おい夏海っ……、ヤバイからやめてくれ。つくっ」

「やらあ……んぶっんぶっんぶちゅっ……。たえりゆね……ブププッ。りやあこりえはど
う？ はあー……ヂユチュヂユチュヂユチュヂユチュヂユチュヂユチュヂユチュ」

グッ速っ……!! いきなりの高速フェラに俺のチンコはすぐに爆発しかける。

「ヂユチュツ……んブウううップツツ……ゴキユツ！ あー大つきくて顎疲れちゃつ
た」

夏海は最後にもう一度大きく吸い付いてようやくチンコから口を離した。

「ねえおにいちちゃん……あたしのあそこ、もう濡れてるのわかる？」

そう言っつて夏海は俺の方にズイッと水色の陰部を突き出してきた。

一部が湿って色濃くなっている様は、いやが上にも俺を興奮させてきた。

「もう濡れてるし挿入いれていいでしょ？ つていうか挿入いれるから」

「っ?! まで！」

「待たない。そうやって時間稼がれるとまたおちんちんが萎えちゃうもん」

夏海の言葉に我を取り戻して制止するが夏海は知ったことかと俺の顔の前で膝立ちにな

った。

素早くブラのホックを外して、そのブラを床に投げ捨てる。

そして、俺の上で反転した。

「どーお？ あたしのおっぱい、ちっちゃいけど可愛いでしょ？」

小ぶりと言うのも少しはばかられる小ささだが、その先の色素の薄い乳輪と一生懸命自己主張している小さな乳首が可愛いし、なによりエロい。

「じゃあ今度はあ……」

そして俺の上で脚を閉じて上に持ち上げた。

「コッチね？」

そして、パンツをゆっくりと膝の方に上げる。

現れた夏海のマ○コは、幼さが残る綺麗な一本筋だった。

よく見ると少しだけ、陰唇が覗いている。

その下のピンクのアナルは恥ずかしそうにヒクヒクと動いていた。

「どお？ 見える？」

ゆっくりと脚からパンツを引き抜いた夏海は、そのパンツを脇に置く。

両手を脚にかけて、ゆっくり開脚。

なんというか、ご開帳って感じだ。

俺は、言いたいことも忘れて見蕩れてしまっていた。



「やだ、おにいちちゃんそんな見すぎだよお。でも……見られるのって気持ちいい……」
夏海の秘部は足を広げて閉じていて、毛は恵より少し濃いのが意外だった。

「あ、今少し毛が濃いつて思ったでしょ。あたしの悩みなんだからあんまりジロジロ見ないでよお。でも興奮する」

この時点で、俺はもう夏海とのセックスに抵抗がなくなっていた。

だからだろう。

「なあ夏海。手で広げろよ」

こんなこと言ってしまったのは。

夏海は脚を持っていた手を外した。

両脚は曲げて俺の顔の両脇に落とす。

そして両手を筋の両端に置いて、

「うん、見て」

ヌチャツという水音と共に裂ける縦筋。

「どーお？ あたしのおマ○コ。おちんちん舐めてるだけでこんなに濡れちゃったの」
閉じていれば可愛らしいただの性器。それが割れた途端に不自然なほどに赤々としたマ

○コと言うに相応しい変化を遂げた。

ヒクヒク動いているアナルの上で、テラテラ光る膣口と尿道。

俺は思わず顔を上げて、その肉に顔を埋めた。

「あああん!? お、おにいちちゃん! さつき…ひいん! ……自分でいきなりはだめって…ああアツ…言ったくせにいい!」

そんな夏海の言葉を無視して舐め回す。

初々しい酸味と粘っこい愛蜜が口元をネットリと濡らすが、俺は構わず未熟な性器を丹念に舐め回す。

「あつああ…んうつ…フツ…アああアツ…は、はげ…ヒヤツ…はげしい…アアアツ!」

どんだん溢れ出る愛液と俺の唾液が混ざって凄まじい淫臭が俺の顔に纏わりつく。

「ああつ…んンツ! ……あんアアアツ…んんんつ! ……ああアツアツあ! んんンンツ…アハア…おにい…ちゃん…んアツ…気持ちいい…アアああつ」

俺は鼻先でクリトリスを擦りながら舌先を少し膣の中に入れて掻き回した。

「アアアアツ! それダメええ!! チカチカする! アアアア! だめイクツ! もうイクツ!! いああああああああ!!」

膣道が舌先をグイグイと締め付けてくる。

「ハアツハアツ…おにいちやあん…もう挿入れていいよね? だつておにいちちゃん舐めてくれたんだもん…もう我慢の限界だよお」

あ、やべ。つい夢中になってた。

夏海の淫気にでも当てられていたのか。正気に戻った俺は慌てて叫んだ。

「さて！ つい理性が飛んでたけどやっぱりだめ！」

「もう無理！」

夏海はそう言つて俺の上から離れた。

振り返るその顔は口元を上、目尻を下に歪ませていた。可愛らしかったはずの黒目は跨っているモノをしつかり凝視している。

そして、俺のチンコを手に持ち自分の秘部へあてがった。

「ハアツハアツハアツハアツ。おにいちゃんのおちんちん……。 やつと挿入る……」

目を見開いて、挿入るところをガン見している夏海。

「な……。夏海頼む。他のことならなんでも聞くから」

そう懇願すると夏海は俺の方に顔を向けニッコリ微笑んだ。

あ、これ懇願すれば……。なんて思つて口を開こうとして気がついた。

夏海の目は……。目だけは終始下に向いていたことに。

「諦めて」

完全に勃起していた俺の肉棒は、夏海の秘裂に一気に呑み込まれた。

瞬間、凄まじい膣圧が俺の股間に襲いかかってきた。正直言うとなんか少し痛いくらいだ。

ああ、俺の息子よ。せめて膣内射精だけは堪えてくれ。

夏海による蹂躪を受け入れる覚悟を決め、俺は処女マ○コの刺激に備えケツに力を入れた。……。のだが……。一向にやつてこない。

どうした？

夏海を見やると顔を下にしたまま全く動こうとしない。

身体を小刻みに震わせてまるで何かを堪えているような……あ、まさか。

「なあ、夏……」

「おにいちゃん……」

「な、なんだ？」

そして顔を上げた夏海の顔はダラダラ流している涙でグチャグチャだった。

暫しの沈黙。からの夏海の口から出た言葉は、

「痛くて動けない……」

「やっぱりか……」

「あのなあ……あーまあとりあえず抜け。痛いだろうけど抜いてしまえばとりあえず今ほ

ど痛くはなくなるはずだから」

「いだいよお……」

「だから早く抜けて」

「うん……」

夏海は非常にゆっくりと腰を持ち上げる。

「んぐっ……フンッ……んググハッ……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……ぬ、抜けた

あ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>